

療護看護プログラム終了後の変化についての考察—評価表からの読み取り—

竹内 葉子、秋広 由美子、鈴木 敬子、岸部 友美

自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部

【はじめに】 昨年の意識障害学会で生活予後診断に基づいた看護プログラム（以下療護看護プログラムと称す）による介入の変化を評価表を通して考察し、「認知」の変化が「摂食」「運動」の変化を引き出す関わりに繋がることが報告された。今回、介入終了後5～14ヶ月を経過した患者について再評価した。その結果から考察したことを報告する。

【研究方法】 対象は療護看護プログラムを実施し、現在も千葉療護センター入院中の6例。RyogoNursingProgram（以下RNP）評価表を用いて、2015年4月時点で再評価した点数を、介入前後と比較し、変化のあった例について検証した。

【結果】 今回対象となる6例の内、5例は介入終了後5ヶ月以上経過しているが、変化が認められた。「運動」は3例に点数の上昇、1例に下降、「認知」は4例に上昇、1例に下降、「摂食」は4例に上昇、1例に下降、「排泄」は1例に上昇があった。事例) 20代男性。介入時より摂食のアプローチを始め、終了後も継続した。介入終了時から14ヶ月後で「運動」6点「認知」8点「摂食」13点「排泄」3点といずれも上昇が見られた。

【考察】 療護看護プログラムは日常的なケアの組み合わせであるが、介入期間終了後の全ての介入内容の継続は難しく、課題となっている。しかし、介入時に引き出すことのできた能力に関する関わりを終了後も継続することは、その能力だけでなく他の能力にも複合的に影響して全体の機能の維持もしくは改善につながっていくことが推察された。

【結論】 介入によって明らかになった患者の能力に対し、介入終了後も関わりを続けることで新たな能力の維持もしくは改善にもつながる。